―15周年にしてなお課題―
『福祉を理解した心』

事務長　遠藤　れい子

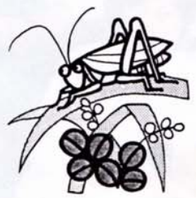
二〇一五年の日本人の高齢化率は25％に達するだろうと予想されているが、白鷹町の住民としても、白光園の職員としても、「20年後のことか」では片付けられない、真に目前に迫った大きな課題なのです。なぜなら、今年、平成7年度中にも白鷹町の高齢化率がその25％に達しようとしているからです。

白光園の開設は近隣の他市町村に比べて比較的に早く、15年前の昭和55年です。いち早く将来を見据えて取り組まれた関係各位のご尽力と地域の皆様のご理解を、今更ながらに有り難いことだと思う次第です。

福祉には「量」と「質」が同時に要求されると思います。量とは、制度や施設や設備や職員数の面で、質とは「福祉を理解した心」です。この「福祉を理解した心」こそ、白光園の職員一人一人に課せられた最大の任務です。同時に、15年間、いろいろな問題に直面した時にも考えることでしたが、永遠の課題だとも言えるでしょう。お世話をして差し上げなければならないお年寄りがいる、だから必死にお世話させていただきます。確かに、これも立派な福祉の心に違いありません。でも、私達職員は、それに甘んじることは決して許されないことだと肝に銘じています。

福祉とは「生き甲斐のある人生を過ごせる幸せ」である、と信じているからです。私達職員は、人間の生き甲斐とは何であるか、このことは片時でも忘れないでお年寄りの方々に接しなければなりません。当然のことながら、私達職員は私達職員よりも長く深い人生の経験をお持ちの大先輩の方々に接しているからです。敬いながら生き甲斐のお手伝いをさせて頂けるこれが私達職員の何にも変え難い幸せにならなければならないのです。

何も福祉のことがわからなかった私をここまで支え、育ててくださいました関係各位の皆様に感謝を申し上げると同時に、白鷹福祉会職員としての「福祉を理解した心」の永遠の課題に取り組んでまいりたいと思います。



入所者の声

白光園に入って

石井　光英

白光園に入所するまでは、とても不安で、暗闇の中に入って行くような、一生を過ごす気にはなれず、医師の勧めで、不本意ながら入所に踏み切ったのは、偽ざる気持ちであった。

現在、白光園での楽しみは、食べる事、寝る事、週二回の入浴、そして月々の行事と誕生会、毎回寮母が趣向をこらした出し物等をみて楽しんでいる。

食事は、献立表を一週間前配布され、内容を予じめ知ることができると共に、栄養のバランスを考えていてくれる。

看護婦・寮母（父）・調理員等、各職場の方々のたゆまざる努力によって、安心した生活を送っている。

白光園で思うこと

五十嵐　かん

白光園で生活して思うことは、具合いが悪くなると、すぐ病院に連れていってくれてありがたい。

ある日、血痰が出た時の驚きと不安、でもすぐ入院し、点滴を受け、まもなく退院することができた。また、腰が痛く、動けない時、ベットで風呂に入れてもらったり、身の囲りの世話や、毎日違った献立で、とてもおいしく、有難く思っている。

職員の声

「回　想」

調理主任　樋口　美智子

「俺の事さかまうな。」大声で怒られたのは、十五年前。まだ入所者の処遇に、どうあたったらよいかわからなかった頃、親切で行なったことが、相手には通じなく大きなショックを受けました。

その時、あるおばあさんがお茶を差し出し、「気にすっ事なえ。これからいろんな人と接して行がんなえだ。気にしねで頑張ってけぇな。」と励まされました。ただ手助けをするだけでなく、相手を見守る気配りの大切さと、相手を傷付けず励ます心のゆとりを、同時に学び、心の中がスッキリした事が、今浮かびます。

「三年を振り返って」

寮父　伊藤　靖

私は、白光園の職員として働くようになり、三年目になる。最初はやっていけるか不安もあったが、職員のみなさんに助けられたり、いろんな事を教えられながら、今日まで来ることができた。先輩職員の仕事に対する情熱は素晴らしく園最大の行事「寿祭り」はすごいものである。前日からステージ、観客席、出店など、全てが職員の手で準備し、プロ並みを感じる。入所者は、家族と共に高玉芝居を見たり、器楽クラブの演奏を聞いたり、また、入所者と職員が一体となり、楽しい一時を過ごす。終った後の充実感は、素晴らしいものだ。

今後共、先輩方を見習い、早く一人前になれるよう頑張りたいと思う。